こんな先生いるよ！

「社会派学生から文学・文化の研究者へ」

教養教育研究院
葛飾キャンパス教養部　教授
昼間（ひるま）　賢（けん）　先生

古くて新しいフランス

先生が研究しているフランスの文化はどんなところが魅力なのでしょうか。

私が大学で研究していたのは近代文学のマルセル・プルーストで「失われた時を求めて」という作品で知られています。

学部では政治経済を勉強してきたのですが、ちょうど地球的な環境問題が問われる時代に入り、大国間の利権争いなども絡み、うまくいかない状況を見て、学問としての興味を失っていきました。同時にアメリカなどの大国より、文化が集まってくるフランスに興味を持つようになりました。それで学士入学を経て、文学部に編入し大学院修士課程終了後、フランスのパリ第４大学（ソルボンヌ大学）に進学したのです。

当時のフランスは世界の音楽が集まり、民族音楽からロック、ポップスなどのメッカとなっており、また、様々な文化が集まる場所で、魅力にあふれていましたね。

フランス人は、おしゃべりで陽気ですが、意外と保守的だったり、しかし科学の先進地であったりもして面白いです。

理大生は、やはりメカに興味を示す

理系学生は教養教育としてどんな授業に興味を持つのでしょう。

ここではフランス語の授業も受け持っていますが、教養教育という枠組みの中で、人文社会、芸術の分野での授業を受け持っています。例えば、音楽文化論では楽器からのアプローチがあります。雅楽には笙という楽器があり、音源となるリードによって1つの楽器に分類されます。これはヨーロッパのアコーディオンやバンドネオンと同じ系統の楽器で、中国からヨーロッパ諸国へと伝わっていったものなのです。

理大の学生は、やはり「モノ」への興味が強いのか、楽器の構造・メカニズムなどの話に興味を示すことが多いように思います。また、写真について文学の方面から解説する授業もあります。

子供のころに広島で感じた記憶

大学時代に人生の大きな転機があったそうですが、幼少期に何か心に深く感じたことがあるのでしょうか。

私は、５歳から10歳くらいまで、父親の転勤に従って広島で暮らしました。広島には原爆の記憶を失わないための教育があり、県外から入っていった子供の私にはとても強烈な印象を残しました。その後、その記憶が消化しきれず、ずっと広島に行くことはなかったのですが、２０１１年東日本大震災を経て、自分の社会観が崩れそうになる中で、自分には広島での経験があると、ようやくつながったのです。それで、最近久しぶりに広島に行ってみて、とても良い街になっていて本当に嬉しかったです。

実は、私はかなり遅くに結婚しましたが、その相手が、戦争経験国であるベトナム人なのです。

子供もまだ小さいので、父親である私や、母でもある妻のことなどを、将来きちっと話してあげられるように準備しておきたいと思っています。

太田正人（ジェイクリエイト）

[写真左] ベトナムの留学生とともに
[写真中] フランス・アルザス地方の葡萄畑で
[写真右] 音楽プロデューサーと共催したイベント